〔論　説〕

『経済学の冒険』のダイナミズム
――なにを語り、どこを目指すか――

塚本恭章

趣旨とねらい――「自著紹介」と「対談」としての論説

拙著『経済学の冒険――ブックレビュー&ガイド100』（読書人、二〇二三年九月五日、同年一二月八日第二刷）が刊行されました。本稿を「論説」として寄稿するねらいを一言でいえば、「自著紹介」です。より正確に述べれば、本書をめぐって吉川洋先生（東京大学名誉教授）と「対談」させていただき（二〇二三年九月一三日、場所は財務省財務総合研究所・名誉所長室）、その対談のために事前に作成し、吉川先生にもお送りしてあった自著紹介であり、当然ながら、吉川先生への質問事項を多く含むものとなっています。吉川洋先生と岩井克人先生（東京大学名誉教授）のお二人に「帯推薦文（表紙）」を書いていただいたので、その意味内容をふまえながら、以下の諸論点についてあらためて語り直してみたいと思っています。その際、拙著『経済学の冒険』の刊行にむけて考えてきたことを吉川先生に投げかけ、拙著を自分自身でより内在的に把握し俯

瞰視するための機会とも捉えてみたいと考えています。「経済学の冒険」を続けるための作業です。実際の対談内容は、本稿のあとに別途掲載しています。本稿と対談原稿の両方を通読していただくとあきらかなように、実際の対談は本稿の順序に沿うものではなく、また拙著の内容そのものとの関連性もあまりないものとなりました。しかしながら、吉川先生が対談をつうじて発せられた経済学の現状とそれに対する批判的見解、これからの経済学のあり方への提言、先輩の岩井さんや師の故宇沢弘文先生の学問とその個人史的回顧などはとても興味深い豊かな内容をたぶんに含んでいます。事前に準備した「自著紹介」と実際の「対談内容」をあわせて読むことの相乗効果を期待したいです。対談内容の縮約版は、「週刊読書人」二〇二三年一一月二四日、第三五一六号、二面にて掲載されています。

〈自著紹介——目次構成〉

○）はじめに—『経済学の冒険』刊行にあたって
一）「本」を読んで、「書評」する
　一—一）東大「吉川研究室」は小さな図書館？
　一—二）「書評文化」を守る
二）「選書」ってやっぱり難しい？
　二—一）選書の基準
　二—二）「大きな問題」には「古典」が不可欠？
三）「経済学史」から多様な経済学を
　三—一）「経済学史」の存在意義を問う

三―二）主流派経済学批判をめぐる岩井と吉川
―ケインズとシュンペーターのいま
四）「人間の経済」を求めた宇沢弘文
四―一）「学問の師」と「書物の師」
四―二）「宇沢問題」は解決できるか
五）おわりに―「経済学の冒険」を続けるために

〇）はじめに―『経済学の冒険』刊行にあたって

吉川洋先生と「対談」させていただく機会を得たことは本当にありがたいことです。今年五月末の春学期「経済学史」の講義で、吉川先生の『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』の「帯」をふくむ表紙カバーを配布し、本書の特徴などについて受講学生にむけて話をしているときに、話しながら「対談相手をぜひ吉川先生にお願いすることはできないだろうか？」と、突然ふと思ったのです。ただお願いすべきなのか、またお願いしてもよいのかはだいぶ悩みました。すでに「帯推薦」の文章を書いて戴いているうえに、さらに「対談」に応じてほしいとは厚かましいのではないか。こうしてお願いすべきか逡巡しながらも二日後には考えをまとめて、メールをお送りしたところ快諾していただくことができました。快諾メールを頂戴したときは嬉しさとともに驚きました。春学期「経済学史」講義の最も大きな収穫のひとつといってよいでしょう。**もともと春学期授業では、シュンペーターとケインズという二人の経済理論家に焦点をあてており、この講義構成案を二〇一一年度赴任からずっと継続しているのは、吉川先生の当該著書からの影響です。そのため、授業中での**

ひらめきは偶然でなく、むしろ必然だったのかしれません（一年次のオムニバス方式「経済学への招待」でも、私のテーマは「ケインズとシュンペーター：貨幣と革新の経済思想史」ですので、ここにもその影響があります）。

さらにこの点は、『経済学の冒険』のプロローグでも述べたことですが、わたしが一般紙に書評し始めてから間もない頃に、吉川先生の『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』（ダイヤモンド社、二〇〇九年）を書評させていただく機会を得ました。書店でたまたま出会った本でしたが、一読し終えてぜひ書評できないかと考え、当時の「図書新聞」編集長に申し出たところ、快く承諾していただくことができました。その書評に吉川先生が高い評価をしてくださったことが、「書評」というものを続ける大きな原動力になったことは間違いありません。**いや、吉川先生は一般紙に書いた私の書評を、まさに「最初に」評価してくださった研究者であったのです。**吉川先生と東大研究室でお会いしたのは、二〇〇九年六月一六日、あの日から一五年以上の月日を経ています。本書は一五年分のささやかな書評集です。

余談ですが、当初は「一冊一〇〇〇字で一〇〇冊レビュー」というプランでした（一〇万字で二五〇枚。コンパクトな書評集をイメージしていました）。ただ、これまで書評してきたものを一〇〇〇字に縮小することには大きな困難がともない、また、足りない冊数を補うために新たに書評していくとなると、多大な時間を要することとなってしまい、永久に終わりません。そこで、これまでの書評は基本的にそのまま活用し、「ブックレビュー&ガイド」として一〇〇冊をカバーするプランへと変更しました。そうなって、ようやく本書の作業が具体的に進んでいきました。

二〇二二年九月末に父が死去し、恩師の一人である伊藤誠先生も昨年二〇二三年の二月に他界されました（伊藤誠先生への「追悼文」は拙著に所収されています）。経済学以外の書物として扱っている男子テニスのレジェ

ンド、ロジャー・フェデラーは二〇二二年九月に四一歳で現役引退し、作家の森村誠一さんも昨年二〇二三年七月末に九〇歳にて亡くなりました。本書がそうした出来事を経て、二〇二三年九月五日に刊行されたことは私なりに感慨深いものがあります。伊藤誠先生の遺著『『資本論』と現代世界――マルクス理論家の追憶から』が、拙著と同じ二〇二三年九月五日刊行というのも何かの縁を感じます。

一）「本」を読んで、「書評」する

一－一）東大「吉川研究室」は小さな図書館？

一－二）「書評文化」を守る

二〇〇九年六月一六日にご一緒にランチをする約束をさせていただき、東大の吉川研究室を訪問したときのことが今でも鮮明に記憶に残っています。入室するなり、研究室内には、まさに「本、本、本」、「本の山！」です。吉川先生のデスクに辿り着くまで、そっーーと本を背中越しにしながらゆっくりと歩かないといけません。ここはまるで「小さな図書館だな」、そう思いました。それ以前に、吉川先生のご自宅は博物館並みの蔵書があるとどこからか聞いたことがありましたが、実際に研究室をみて瞬時に納得できました（東大の博士課程一年次に、青学の根岸隆先生の研究室を一度だけ訪問させていただきましたが、根岸先生の研究室にはいわゆる経済学の国際ジャーナルが簡素よく綺麗に並べられてありました）。研究上において必要な本という事情もあるはずですが、私にはそれ以上に、吉川先生にとって本というものは生きていくうえでの大きな活力になっているのではないか、そう強く感じました。しかもその本はけっして「経済学」分野に限定されえないはずで

す。吉川先生において、そもそも「本を読む」という知的営みは何を意味し、何をもたらすのでしょうか。たとえば「日本経済新聞朝刊」二〇二〇年四月四日の「リーダー本棚」のインタビュー記事を読むと、座右の書はケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』で、愛読書には、大内力『国家独占資本主義』や宇野弘蔵『経済原論』などマルクス経済学の文献も入っているのがとりわけ印象的です。記事の最後に、「読書は私にとって人生の一部といえるほど大切です」と述べておられます。

＊

インターネット社会、そしてスマホが大きな情報ツールとして普及した現代、「活字」というものに触れる機会が年々大きく減っています。本のようなスローメディアよりは、スマホで「ググる」ことで瞬時に情報入手できるファストメディアが大きく尊重される傾向にあります。とくに若い世代、とりわけ学生などはそうでしょう（生成ＡＩの出現はさらに今後脅威となる可能性が高まっていくでしょう）。「本を読まない」ことは「本を読めなくなる」事態を誘発し、さらには「本なんて読む必要はない」という間違った通念を生み出しかねません。母国語である「日本語を学ぶ」、あるいは「日本語で思考する」ことは、日本人としての基本的なアイデンティティを維持していくうえできわめて重要な意味をもっていると思います。書物や活字に触れないことは、たとえば大学の授業で、「日本語なのに何を言っているのか分からない」学生を量産していく危険性を孕んではいないでしょうか。実際に大学で授業をしていてもそう感じることがただあります。経済学の講義内容が難しい以上に、学生諸君には「日本語そのものが難しい」。それによって、専門用語の多い経済学はいっそう難しくなってしまう可能性があるのではないでしょうか。

拙著『経済学の冒険』は、経済学の著書についての「書評」集であり、「書評は文化だ」という吉川先生の「帯推薦文」が意味し、含意するものはひときわ大きいにちがいないと私は思っているのです。なぜならば、「文化」

とは、一人一人の人間自身の地道な知的営為の総体として長い年月をかけて育み培い、維持していくことで初めて「文化」としてしっかり地に足根付くものであると思われるからです。逆にいえば、なにもしなければ「文化」というものは次第に廃れていくものではないでしょうか。人間が育み守っていくもの、それこそが「文化」であり、拙著で試みてきた「書評」という地味で地道な作業もまた、その一環を担うものにほかならないと思います。**あえて自分自身で吉川先生の「帯推薦文」を過大評価させていただくならば、「塚本さんの今回の本は、書評という文化をこれからの未来にむけて守っていくことを宣言した書だ」と、言い換えることができるかもしれません。**

*

私が「読書人」など一般紙にこれまで書いてきた書評は、そのデータベースが未構築という理由もあってか、私以外の第三者が検索をつうじて当該書評の存在を知り、それを有効活用することに大きな支障が生じているのが現状です。簡単にいえば、私が書いてきた「書評」という「記録」は自分自身で守っていくよりほかないのです。正確な「記録」というものがなければ、「記憶」から次第に消えていくしかありません。**したがって拙著は、自分自身の「記録」を「記憶」とともに守るという使命を担っているのだと自負しています。そしてさらに、冒頭プロローグでも述べたように、日本語で書かれた本・書物を読むことの大切さを薦める、私なりの「ひとつの実践」にほかなりません。とりわけ経済学部の学部生、あるいは経済学部への進学を考えている高校生らに手に取ってほしいと思っています。**大学生に講義のなかで「本を読むように」というのはとても簡単なことです。「言うは易し」です。ところが、それではなかなか思うようになりません。ただ、大学教員みずからが「アクション」で示せば、そのインパクトは多少なりとも学生の意識と行動を「変える可能性」があります。あくまで「可能性」ですから、残念ながら、なにも変わらない可能性だってありえます。実際のところ、「本

七

を読むことが好きだ」という学生はいまもそれなりに存在しており、そういう場合、拙著が彼ら・彼女らの背中を後押ししてくれることを大いに期待したいところです。

二）「選書」ってやっぱり難しい？

二―一）選書の基準

二―二）「大きな問題」には「古典」が不可欠？

数多く刊行される本から「選書」するということは、当然ながら、「選ばない本」があるということになります。書評を続けていくと、たとえば一度も読んだことのない著者の本を選ぶことには、最初は心理的な抵抗が伴います。著者による今回の新刊がそれまでの既刊のものと比べてどこがどう違うのか、どこに新たな進展があるのかをしっかり読み込めないと、いい書評が書けないからです。当たり前のことですけれども。しかし一度「選書」して「書評」し、当該本に知的関心をもつことができた場合、その後の著者の新刊にもおのずと注目できるようになります。こうやって、「読書の幅」が少しずつながら広がっていったように思います。「選書の基準」という観点でいえば、やはり「本のテーマ」に導かれていきます。

＊

拙著『経済学の冒険』は、主に第四章までで四つのテーマを選定していますが、そのなかでも、第一章「市場と貨幣」と第二章「資本主義と社会主義」は、経済学における主要学派のすべてが中心的論点として考察対象としてきたものであり、二一世紀的な「大きな問題」として、引き続き検討されていくべき性質をもってい

ると考えられます。**第一章「市場と貨幣」において、たとえば岩井克人先生と西部忠先生の「貨幣論」には共通点がありながらも、相違点もまたきわめて顕著です。むしろ後者のほうが際立っているといっても過言ではありません。**オーストリア学派のハイエクによる『貨幣発行自由化論』（一九七六年）を否定する岩井先生に対して、それこそを理論的根拠にしながら貨幣の多様性論を強調する西部先生とではハイエク評価が一八〇度逆方向に位置しており、その論理的帰結は、第二章のテーマである「資本主義と社会主義」の理論的理解とそこからのオルタナティブの可能性についての評価の違いにも明確に立ち現れてきています。「貨幣論」の違いが「市場理論」（ないしは「市場像」）の違いを経由して、「資本主義論」の違いにもなっているわけです。それでは、このような学問的状況に常に直面し続けている社会科学としての経済学は、どうするべきなのでしょうか。今後どうなっていくのが望ましいのでしょうか。私自身の見解では、両者のあいだになんらかの「議論」なり「対話」が生じうることによって、「貨幣論」や「資本主義論」の理解がいっそう深まることが期待される、というものです。第三章のテーマである「経済思想と経済学説」のサブタイトルに「競合性と多様性のはざまで」と付けておいたのは、こうした立場をはっきりと表明するためのものです。拙著では、こうした問題喚起をも含み込めて全体が構成・展開されている側面もあると考えており、すでに解決済みの問題ではなく、むしろ今なお「未解決」ともいうべき「大きな問題」を炙り出しています。

＊

このような上記の論点に対して、吉川先生はどう考えておられるでしょうか。吉川先生の場合、「理論」研究と「現実・現状」分析とを明確に架橋させ、いわゆる「経済学学」を突破する道筋をずっと模索されておられます。そして岩井先生や西部先生らと同様に、「経済学の古典」をきわめて尊重されておられる。二〇一二年七月の「読売新聞朝刊」のインタビュー記事で、岩井先生は「他の人と異なりたかったら、逆説的だが、百

年、千年と生き残ってきた古典を読むべし。……もはや古典しか、創造力を生み出す源泉はない」といわれています。そしてさらに続けて、「古典の読書や純粋理論の研究などは、一見すると無駄だ。だが、想定外の事態（たとえば二〇一一年三月一一日の東日本大震災――塚本補記）が起こってしまった時に、動じない見識を持ち、的確な判断をするには、まさに古典や理論しか頼るものはない」ともいわれています。ケインズ『一般理論』やシュンペーター『経済発展の理論』など、吉川先生が『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』（二〇〇九年）で強調されている基本精神こそは、岩井先生のそれと見事に合致しているはずです。なぜならば、その後、二〇〇八年にはリーマン・ショックという世界金融危機、さらに二〇二〇年以降には新型コロナウィルスのパンデミックという未曽有の人類史的危機に、われわれは直面することになったからです。「大きな問題」に挑むために「古典」は欠かせないにせよ、では、「古典」をどう現代に活かしていけばよいのかという問題も別途ありそうですね。ただ、これ自体もまさに「大きな問題」にほかなりません。

三）「経済学史」から多様な経済学を

三―一）「経済学史」の存在意義を問う

三―二）主流派経済学批判をめぐる岩井と吉川

―ケインズとシュンペーターのいま

拙著『経済学の冒険』の第三章の表題は「経済思想と経済学説」です。私は初回の「経済学史」の授業で、経済学史は「歴史」科目ではなく、あくまで「理論」科目として捉えており、ただ単に経済学における競合的

諸学派の歴史的発展の系譜を跡付けるにとどまらない意義をもっていると説明しています。簡単にいえば、暗記科目ではないということです（いうまでもなく「経済史」科目も暗記科目ではけっしてありません）。「歴史」という言葉がつくと、どうしても過去の学説や思想を時系列的に振り返るものであり、そこには概して「古い」という固定観念的なイメージが伴いがちです。**経済理論の時代性や歴史性はもちろん重要視しながらも、経済学史を「理論科目」として明確に位置づけることで、「経済学史」は「経済学」そのものを反省（内省）できる学問となり、それによって、はじめて未来志向的な議論が可能になると考えられるからです。**とはいっても、経済学教育カリキュラムのなかでも、「経済学史」や「社会思想史」のような科目の重要度が高いとはいえないのが現状であり、むしろ縮小・排除されていく傾向さえ見受けられます。「マルクス経済学（経済原論）」不要論も加速化しています。「時代の流れ」という不可避的でややもすれば悲観的な見方もありえますが、むしろそうした外在的な要因に事態の本質を帰着させるのではなく、**たとえば「理論家」にも関心をもってもらえる「経済学史」のあり方を探究することのほうが、ずっと生産的ではないでしょうか。それによって、「経済理論」と「経済学史」のお互いが排他的な研究領域とはならず、経済学の多様性や競合性を堅持することそのものも許容し合えるのではないでしょうか。では、そのような「経済学史」のあり方のための方法はあるのでしょうか。**

＊

ひとつの有力な試みの成果は、吉川先生の『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』に結実していると思います。そこには、時代性と時代の問題、そして現代の問題との関連を明示的に意識しながら、ケインズとシュンペーターの経済学を有機的に統合するという「経済学史」研究をつうじた「経済理論」の発展をめざす研究が展開されているからです。それによって、「マクロ経済学」とはどういうものであるのか（同じことですが「マクロ経済学」とはどういうものでないのか、たとえば「新古典派的な」マクロ経済学との違いなど）を、

ケインズの「有効需要の原理」の理論的・現代的意義とあわせて理解することができるからです。さらにいえば、ケインズの経済理論における欠落部分（シュンペーターが強調した「イノベーション」という観点）もまた明確になるからです。**「資本主義」というもののあり方そのものが強く問い直される必要性がある現在において、まさに「資本主義」そのものに真正面から挑んだケインズとシュンペーターの経済理論は色褪せるどころか、むしろ輝きを増しているはずです。**ケインズがみずからの経済理論の中心に据え置いた「貨幣」や「期待」、「不確実性」そして「歴史的時間」の意義は常に現代的意義をもっています。シュンペーターの「イノベーション」も同様です。

やや余談になりますが、拙著『経済学の冒険』を刊行するにあたり、今回『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』を読み直してみました。本当にとても読み応えのある作品であり、ケインズとシュンペーターの主要著作を丹念に概説しながら描き出される世界こそはまさに（ケインズのシュンペーターによる）「経済学の冒険」にほかならないと強く実感したところです。吉川先生の本書での見事な筆致が、われわれ読者を「経済学の冒険」という雄大な旅に心地よく誘ってくれるのです。ケインズとシュンペーターの偉大さと彼らの経済学の理論的魅力はもちろんのこと、ケインズとシュンペーターがお互いにどのように意識し合っていたのか、いなかったのかという人間関係そのものにも強く興味を惹かれました。そしてあらためて強く印象に残ったのは、やはり**ケインズとシュンペーターという二人の天才経済学者のあまりに多くの「際立った対照性」でした（共通項は、二人が「経済学の中心地に学んだ」こと、吉川先生が「栴檀は双葉より芳し」といわれるように、二人が「生まれながらにして類まれなる優れた頭脳」をもっていたという事実でしょうか）。**ケインズとシュンペーターの経済学とそこに投影された経済についてのビジョンの「際立った対照性」にもかかわらず、「需要の飽和」の一点で両者の経済学が交叉することを見いだし、それを理論モデルとして精緻化するという吉川先生の研究

プログラムの潜勢力には感動すら覚えました。いや、むしろケインズとシュンペーターが一八〇度異なる経済学を展開していたからこそ、交叉可能な一点が明確に浮かび上がってきたのであり、ケインズとシュンペーターが「生きている」というのは、現実の経済の本質を見抜いた二人のビジョンそのものなのでしょう。

もうひとつの有力な方法としては、岩井克人先生による『経済学の宇宙』（日本経済新聞出版社、二〇一五年）や『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』（東洋経済新報社、二〇二〇年）で詳述されているように、**経済学史における「思考」の基本的対立構造―「経済学的思考」対「不均衡動学的思考」―を析出し、これまでの「経済学の歴史」のなかで抑圧され抹殺されてきた思考や原理を復活させると同時に、それとは逆に、葬り去られるべき思考や原理を峻別するというものです。**そして当然のことながら、「経済学的思考」に対応するのがアダム・スミスやハイエク、フリードマンらの「新古典派的な資本主義論」であり、「不均衡動学的思考」に対応するのがヴィクセルとケインズらを始祖とする「不均衡動学派的な資本主義論」として、明確な対立関係にあることになります。岩井先生によれば、アダム・スミスの『国富論』の刊行以降の古典派・新古典派経済学では、「貨幣の自己循環論法」と「利潤の差異原理（＝資本主義の基本原理）」が抑圧されてきたのであり、それらを中核的思考・原理とする「貨幣論」と「資本主義論」こそが正しい「経済理論」として「経済学史」のなかにはっきりと位置づけられなければならないことになります。さらにいえば、**経済学における「貨幣」と「資本主義」についての理論的かつ批判的思考そのものが、実際のところ「経済学」のあり方そのものを規定するのであり、上記の論述内容の繰り返しになりますが、「経済学史」があるからこそ、経済学という学問は真に「反省的」な学問になりうるのです。**こうした学問上のスタンスが、主流派の新古典派経済学批判と軌を一にしていることはいうまでもありません。主流派経済学批判という点において、吉川先生と岩井先生は完全に一致しています。そしてその理論的批判の主要内容は、ケインズとシュンペーターの経済学をどう捉え直すべきかと

いうテーマと表裏一体の関係にあります。

＊

主流派経済学批判における吉川先生と岩井先生の「共通点」と「相違点」についての詳細は、ぜひ吉川先生からお話を伺いたいと思っています。

岩井先生も吉川先生も、米国大学院にて主流派の新古典派経済学をマスターされたのち、その主流派経済学そのものを批判する研究プログラムに積極的に従事されるようになりました。岩井先生は七年かけて『不均衡動学』（英語版一九八一年、日本語版一九八七年）を完成させ、『経済学の宇宙』二〇二一年の文庫版において、巻末に「補遺」として「『不均衡動学』の現代版に挑む」を新たに収録されています。そのなかで、「一九八一年に出版された『不均衡動学』は、経済学の宇宙には何の波紋も引き起こしませんでした」[1]と回顧されてはいますが、岩井先生の理論研究の原点はいまなお主流派マクロ経済学批判としての『不均衡動学』であり、それこそが自由放任主義的資本主義の不可能性を理論的にあきらかにする基礎をなすと考えておられるはずです。その後の「貨幣論」や「シュンペーター経済動学」にもとづく「資本主義論」などの研究は、「不均衡動学」の理論との体系的整合性を意識して推進されたものです。

吉川先生ご自身もまた長らく「新古典派マクロ経済学」を根源的に批判され、「統計物理学」の手法を採用したマクロ経済学の新たな再構築に尽力されてきておられます。フリードマンやルーカス、そしてプレスコットらによる新古典派の理論的革新にもとづく「ケインズ反革命」（とりわけプレスコットらの「実物的景気循環理論＝リアル・ビジネス・サイクル理論」について吉川先生は、「新古典派的なマクロ経済学の終着駅」であると表明されています）は、ケインズの経済学を粉砕しただけでなく、マクロ経済学を無用化するものでもあった、さらにいえば、一九七〇年代以降の三〇年間において驚くべきヒューマン・リソース（人的資源）の

浪費がなされたとも主張されています。**二〇二三年一月三一日号の『週刊エコノミスト』に掲載された吉川先生の「経済学を不毛な知的遊戯に変えた『ルーカス批判』を批判する」という文章のタイトルそのものに、これまでの批判的な問題意識のほとんどすべてが集約されている印象です。こうした一連の吉川先生による重要な指摘の意味を、いまあらためてしっかり理解し直すことが欠かせないであろうと思います。**

ケインズが『一般理論』で構築した経済学は、「有効需要の原理」をコアとする正真正銘の「マクロ」の経済学であり、ケインズ自身が批判した新古典派経済学の「特殊理論」ではありえない。吉川先生は『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』において、ケインズがドイツ人経済学者であるシュピートホフの六〇歳記念論文集に寄せた文章は「生産の貨幣的理論」（一九三三年）と題するものであり、**「景気循環や恐慌を説明するために必要なのは『貨幣経済』の理論である。ケインズがいう『貨幣経済』では貨幣が実体経済に大きな影響を与える[2]」**と述べておられます。いうまでもなく、「古典派の二分法」の否定です。ケインズの経済学は「貨幣的」市場経済の理論にほかならず、貨幣（ないしは流動性選好）が究極的な要因となって、貨幣から利子率そして投資（と消費）をへて実体経済における生産・雇用水準を決定します。「供給がそれみずからの需要を生み出す」というセー法則にもとづく古典派・新古典派経済学では、「S（供給）→D（需要）」という決定の因果関係であったのに対し、「有効需要の原理」にもとづくケインズの経済理論は、まさに「D（需要）→S（供給）」というようにそれをまったく「逆転」させているのです。

他方、フリードマンの「自然失業率」仮説やプレスコットらの「実物的景気循環理論」は、「自然」や「実物」というタームが端的に象徴しているように、「生産の貨幣的理論」を強調したケインズの思想そのものを一掃するものなのです。『いまこそ、ケインズのシュンペーターに学べ』に記載されているケインズ自身の主張をふまえていえば、「経済全体の総需要、有効需要の理論は一〇〇年以上まったく無視されてきた[3]」という、

まさにその新たな視点に立脚して構築されたマクロのケインズ理論をかつての新古典派ミクロ理論の枠内に包摂しようとするものともいえるでしょうか。岩井先生の表現を借りるならば、経済学における「存在の一義性」を「存在の二義性」へと転換させたケインズの試みを、ふたたび「存在の一義性」へと振り子を戻してしまったのが新古典派の理論的反革命にほかならないのです。[4]

さらに「マクロ経済学のミクロ的基礎づけ」からのシュンペーター理論のモデル化も活発化していきましたが、**「産業」や「セクター」の概念が欠落し、最適化する経済主体としての「企業」の「対称均衡」を仮定して構築されたほとんどのシュンペーターの理論モデルは、シュンペーターの精神とはまったく無縁であり、理論家のたんなる知的遊戯にすぎないとも吉川先生は主張されています。**[5] 理論モデルの構築によって本来説明すべき内容がすでにモデル構築の前提として「仮定」されてしまっているならば、そうした作業は無意味であり、それこそまさに「経済学学」の典型的事態にほかならないからといえるからです。いうまでもなく、「経済学」とは現実の「経済（現象）」を理解し解明するための学問であり、経済学者の基本的任務は、その理解と解明を「より深める」ための貢献をなすことです。シュンペーター自身は資本主義経済の「本質」を理解し、それにもとづく「経済発展」現象の解明に挑んだのです。「シュンペーター経済学」がいまや「シュンペーター経済学学」へと姿態を変え、ケインズ理論と同様に無益な作業が反復され続けているようです。**このような経済学の理論研究のあり方そのものは、ただ単に経済学の分析的ツールや方法論が装いを新たにしたことにともなう論理的帰結というよりは、学問としての経済学は何のために存在するのかという根本問題の見直しを迫るものでもあるのではないでしょうか。**したがって、こうした点とも密接に関連し合うのが、「経済学史の存在意義」を問い直すことではないかと私には強く感じられるのです。

話をもとに戻せば、主流派経済学批判をめぐる吉川先生と岩井先生という主題において、私自身が関心のあ

る論点のひとつをいえば、「貨幣の自己循環論法」は貨幣についての「もっとも基本的な真理」であり、「利潤の差異原理」はあらゆる資本主義の諸形態（商業資本主義、産業資本主義そしてポスト産業資本主義）について妥当しうるところの「資本主義の基本原理」にほかならないという岩井貨幣論・資本主義論を、吉川先生ご自身はどのように評価されておられるのかというものです。**岩井貨幣論・資本主義論は、実際のところ、主流派の新古典派経済学への批判にとどまらず、マルクス経済学への批判ともなっているからです。岩井「シュンペーター経済動学」とそれにもとづく岩井「資本主義論」はマルクス剰余価値論を相対化し、岩井「貨幣論」はマルクスの労働価値論を棄却するものとなっています。**

岩井先生の議論には「マルクスについての最大の逆説」とよばれる大変に興味深い論点があり、マルクス自身は本来「貨幣のない社会（社会主義）」をめざしていたけれども、価値形態論の展開をつうじて、それとは逆にむしろ「貨幣の必然性」というものをはからずも証明してしまったというのです（以上は、岩井克人『資本主義を語る』講談社、一九九四年、第五章「マルクスの逆説」）。岩井先生が、マルクス価値形態論の読み直しをふまえた『貨幣論』や「シュンペーター経済動学」をつうじて見いだされたのは、人間社会における「媒介」の不可避性でした。その後、それは「言語・法・貨幣論」として新たに探究されていきました（そうした「媒介」は人間社会を支えると同時に、人間社会によって支えられるという二重の意味での「社会的」な実在であり、そうであるがゆえに、その崩壊は人間社会の崩壊に帰結しうることになります。ハイパーインフレは貨幣という媒介そのものの崩壊であり、貨幣に基礎づけられた資本主義社会の解体でもあります）。主流派の新古典派経済学はまさに「貨幣の忘却・抑圧」からなる理論体系なのであり、そのことは結局のところ、「資本主義の忘却・抑圧」そのものに帰結するのではないかと考えられます。岩井「経済学史」講義の出発点が、古代ギリシャのアリストテレスによるポリスと貨幣と資本主義をめぐる根源的思考の再評価であることにもぜひ着眼しておき

一七

たいです。

四）「人間の経済」を求めた宇沢弘文

四－一）「学問の師」と「書物の師」
四－二）「宇沢問題」は解決できるか

第四章のタイトルは「人間社会と自伝・評伝」です。「学問の師」とは、指導を受けた先生である「人間」にほかなりません。「書物の師」とは文字通り、自分が影響を受け研究の原点となった「書物」であり、おそらくは一生涯向き合うことになるものでしょう。それは経済学の「古典」になる可能性が高いかもしれません。私自身は、故伊藤誠先生の『経済学からなにを学ぶか』（平凡社新書、二〇一五年）の書評の最後に、「最良の書は最良の師である」との一文を書いて締め括っています。

通常、師となる「人間」と「書物」は一体となっているわけですが、そこには明確な違いもあります。「書物」の場合、そこには時間的・空間的制約がなく、いつでもどこでも「書物」は「師」になれる存在です。経済学の偉人が遺してくれた「古典」はまさにそうであり、書いた著者本人と直接的な対話をすることは永遠に不可能ですが、それでも「書物の師」は厳然と存在し続けることになります。**「人間」としての「師」の場合、なにより難しいのは「邂逅」という言葉があるように、そのような人と果たして本当にめぐり会えるかどうか、そして学問的な師弟関係を長期において築くことができるのかということでしょう。**「書物」と「人間」のどちらもきわめて重要であり、学問を継続していくうえで決定的な意味をもつことは間違いありません。ただ、「良

き師」にめぐり会えるか否かは運不運もありそうです。以下では、このような観点から「対談」を進めさせていただきたいと思います。

*

拙著『経済学の冒険』という主題からみてみた場合、第四章の冒頭で書評している宇沢弘文先生こそが、もっとも「経済学の冒険」というものに果敢に挑んでこられた経済学者といえるのかもしれません。やや大袈裟にいえば、「大冒険」と称してもよい知的営為だったのではないでしょうか。いやちがう、そもそもそのような括り方自体が宇沢先生には適用できないでしょう。吉川先生は宇沢先生のゼミに一九七一年の大学二年次の秋から入り、ケインズ『一般理論』をみっちり勉強するうちに学者の道を志すようになったといわれる。まさに宇沢先生は大学で最初に出会った「師」ですよね。エール大学大学院での指導教授で、その当時のアメリカを最も代表するケインジアンの一人であるノーベル賞のジェームズ・トービン教授も、吉川先生にはきわめて大きな「師」にほかなりません。**宇沢弘文とトービンという日本と世界、いや二人ともに世界的経済学者である彼らから吉川先生が学んだこと、得たものは何だったのでしょうか。「学問の師」と「書物の師」、きっと両面あることでしょう。たとえばあのときの「言葉」が今でも強く印象に残っている、そんな温かい励ましとは？**（たまたま今回、東京大学経友会『経友』二〇一五年二月、一九一号での「宇沢弘文先生追悼」を読むことができました。吉川洋先生をふくめ、六人の先生が各々の想いから印象深い追悼を寄せておられます。そのなかにある吉川先生の追悼には次のような文章の記載があります。**宇沢先生をはじめとして、「……経済学をつくる有名な経済学者たちは決して神様ではなく、私たちと同じ人間なのだということである。後年アメリカに留学し、『高名な神様』の何人かに接する幸運を得た私は、そうした高名な経済学者の偉大さは、まさに彼らの『人間』にあることを知ることができた」。さらに宇沢先生は、「一〇〇年の視野で物事を考えられていた」とも書かれ

ておられます。どちらの文章も、宇沢先生という経済学者にして人間としてのふるまいを見極めるうえできわめて重要な核心を指摘されていると思います）。そういえば、宇沢先生の講演やインタビューをまとめた『人間の経済』（新潮新書、二〇一七年）の冒頭文を執筆された、宇沢先生の長女の占部まりさんによれば、スティグリッツは、「ヒロの話は三十年後ぐらいにわかる」と言っていたようです。もしかしたら、それ以上の年月が宇沢思想の理解には必要なのかもしれません。

＊

ところで故内橋克人氏は、宇沢先生との共著『始まっている未来―新しい経済学は可能か』（岩波書店、二〇〇九年）の巻末で、**「教育、医療、社会保障、農業……およそ人間の生存条件にかかわるテーマのすべてが宇沢弘文氏の宇宙である」**[6]と述べておられる。宇沢先生は二〇一四年九月一八日に他界されましたが、宇沢先生の経済学や経済思想はいまなお大きく注視され続けています。ＮＨＫの「欲望の資本主義」シリーズで、宇沢先生を「心の師」と仰ぐジョセフ・スティグリッツの言葉に象徴されるように、さらにまた、作家の佐々木実さんが宇沢先生の評伝『資本主義と闘った男―宇沢弘文と経済学の世界』（講談社、二〇一九年）と当該著書の簡略版である『今を生きる思想 宇沢弘文―新たなる資本主義の道を求めて』（講談社現代新書、二〇二二年）を刊行するなど、宇沢先生の死後、宇沢思想をあらためて体系的に見直す作業が精力的に続けられています[7]。**このような今日の動向は、宇沢先生を「師」とする吉川先生の目からみてどのように映るのでしょうか**。たとえばその答えの一端を著者である佐々木実さん自身が「提起」されてもいるのです。上記の新書版の最後で彼はこう述べているからです。「この小著で私が伝えたかったのは、『社会的共通資本の宇沢弘文』がまだ十分には解明されておらず、したがって、彼の思想の全貌もいまだ明らかにされてはいないということである。宇沢弘文はこれから再発見されるべき経済学者であり、思想家なのだと思う」[8]。彼の真意を一言でいえば、

米国で新古典派数理経済学の最先端研究を担った「前期宇沢」への多大な評価とはまったく対照的に、みずからの自己批判をつうじて「社会的共通資本の経済学」の構築に尽力していった「後期宇沢」というものの宇沢経済学の全体における位置づけがなお未解決のままであり、その潜勢力も解明されていない、その正確な再評価をすることこそが、「宇沢弘文の再発見」にほかならないと。**今後の「経済学の冒険」は、こうした宇沢先生をめぐる未解決問題の解明を含むであろうと私は思います。**新古典派経済学批判を深める意図もあってか、宇沢先生がケンブリッジ大学のジョーン・ロビンソンの経済学に傾倒していったことは、現時点からふりかえってみてどんな意義をもっていたといえるのでしょうか。**「夕闇の赤門前にロビンソンと先生が立つ光景は、今でも脳裏に焼き付いている」。**ふたたび『経友』における吉川先生の宇沢追悼文からの一文です。**宇沢先生は、ロビンソンによる「経済学の第二の危機」という世界的表明を世界で最も鮮烈に受け止めた経済学者の一人でしょう。**

とりわけ晩年の宇沢先生は、『経済学と人間の旅』（日本経済新聞出版社、二〇一四年）や先の『人間の経済』（新潮新書、二〇一七年）などの著書の表題からもはっきりわかるように、「人間（の心）」というものを中心に据え置く「経済学」の再構築に尽力されておられました。そのことは必然的に、シカゴ大学のミルトン・フリードマンらを主導者としながら世界中に席巻された「市場原理主義（自由放任主義）」を捨て去り、ヴェブレン制度主義とジョン・デューイのリベラリズムを現代的に復権させることをも明確に含意しているはずです。「社会的共通資本の経済学」とはまさにその二人を思想的基盤とするものにほかなりません。**上記との関連でいうならば、宇沢先生が最後まで探究され、目指されていた「人間の経済」や「人間の心」を大切にする「経済学」は、これからの未来にむけてどのように実現されうるものなのでしょうか。現時点でいえば、宇沢先生の「理想」はどの程度において実現されているとみなしてよいのでしょうか。**『人間の経済』に所収されてい

る最後の文章「『シロウトの経済学』ゆえの仏心」において、ケインズと石橋湛山を比較しながら、「湛山とちがって、ケインズには湛山のようなノーブルな心があまり感じられません」[9]と宇沢先生が述べておられることに注目できるかもしれません。さらに「教育」という論点についていえば、『宇沢弘文 傑作論文全ファイル』（東洋経済新報社、二〇一六年）のなかで、宇沢先生はこう表明されています。「教育を経済に合わせるのではなく、経済を教育に合わせるのが、社会的共通資本としての教育を考えるときの基本的視点です」[10]。もうひとつだけいえば、佐々木実さんの本を読んでいると、そうした重要論点に対して、宇沢先生が宇沢先生ご自身のなかでどう「整合的に」理解されておられたのかという問題もあるように感じています。拙著『経済学の冒険』に所収した佐々木さんの新書への書評でも書いたことですが、宇沢先生における「新古典派経済学」と「社会的共通資本の経済学」との理論的関係という点です。

＊

スティグリッツや吉川先生と同様に、宇沢先生を「師」とするのが岩井克人先生ですが、以前に興味深いことを聞かせていただきました。宇沢先生の死後、日本経済新聞朝刊（二〇一四年九月二九日）に宇沢先生についての「追悼文」を書かれた岩井先生は、そのなかで宇沢先生の仕事を自分なりに総括できたという「解放感」を味わうことができた、しかし他方でまた、宇沢先生の「社会的共通資本の経済学」を概して評価せず、それは内容的に新古典派経済学のいう公共財のストックと変わらないと述べたところ、その後に宇沢先生に近いところから「反発の声」を何度も聞くことになったと。そして続けて、人を「追悼」するのは難しいものであるとも感じたといわれていました（なお岩井先生の宇沢追悼文については、『現代思想』二〇一五年三月臨時増刊号の宇沢弘文総特集『宇沢弘文—人間のための経済』における、神野直彦氏と内橋克人氏の冒頭対談でも言及されており、異論が投げかけられています）。さらにもっと興味深く重要な論点として指摘しておきたいのは、

これまでの論述内容とも密接に関連するのですが、**岩井先生がいわゆる「宇沢問題」―宇沢先生における、新古典派的な分析手法を駆使する「冷徹な頭脳」と正義感にもとづく自由放任主義批判である「暖かい心」とのあいだのギャップ―の存在を指摘し、宇沢先生自身がその「宇沢問題」に長らく葛藤されてきたのだと主張されていることです。**岩井先生のここでの趣旨は、宇沢先生自身は「宇沢問題」から脱却できなかったこと、すなわち新古典派的な経済理論に代替しうる分析手法の開発に最後まで成功しなかったということです。この「宇沢問題」については、その後、岩井先生の学問上の研究履歴を克明に描き出した『経済学の宇宙』（日本経済新聞出版社、二〇一五年、日経ＢＰ・日本経済新聞出版本部から「補遺」を含む文庫版が二〇二一年刊行）でも言及されているのですが、それが結局のところどうなったのかは本書では不問になっています。あえて言及されなかった可能性もあります。私自身は、岩井先生のＩＣＵ最終講義の内容をとりまとめた『経友』（二〇二二年六月発刊、第二一三号）の論考の最後でも、この点に触れておきました。研究者としての岩井先生の意識の奥底に深く潜み続けることになった「宇沢問題」は、現在どのような位置をなし、どの程度の「解決」がなされたといえるのだろうかと。**吉川先生は「宇沢問題」をどうみておられるでしょうか、それは「解決」できる問題であるとお考えでしょうか。**

とはいえ、現時点で明確に表明しうるひとつの「希望」として、宇沢先生は『社会的共通資本』（岩波書店、二〇〇〇年）において、社会的共通資本の管理・運営に際しては「フィデュシアリー（fiduciary）」の原則にもとづいて信託されることが大切であると述べておられるのですが、その「フィデュシアリー（fiduciary）」という概念こそがみずからの「信任関係論」の基礎に据え置かれていることの意義を岩井先生が説かれていることです。『宇沢弘文著作集第一巻』の「月報一」に所収されている岩井先生の一文は「父離れ」というタイトルです。岩井先生らしいウィットに富んだ大変に興味深い内容の文章ですが、このタイトルに括弧が付けら

れていることについて岩井先生は、「宇沢さんの問題関心の重力圏から逃れられないことを予知していたのだと思います」とのこと。「フィデュシアリー（fiduciary）」という概念がすでに宇沢先生の「思想」のなかにあったことに、のちになって気付かれたからでしょう。ただ岩井先生にとって、そのことは自分自身の「信任関係論」を構築していく過程で大いに勇気づけられ、励まされるものでもあったのです。

五）おわりに―「経済学の冒険」を続けるために

以下は、私なりのこれからの「経済学の冒険」の具体的内容です。

まず一つは、本数は少なくなるでしょうが、これからも定期的に「書評」を書いていくという作業はぜひ続けていきたいと思っています。もちろん一般紙、専門誌を問わず、です。「年末回顧号・経済学」は現在八年ですので、あと二年やって最低でも一〇年間は担当したいです。すでに述べたように、「書評」を書くということはまず「選書」するということですから、他者の研究動向や世の中の出来事や話題に常に目を見開いておくことになります。それによって、「自分の（思考や領域の）狭さ」というものに対して、たえず自覚的になることができるはずです。

二つめは「研究書」の出版です。**今回刊行が叶った『経済学の冒険』は、「記録」を「記憶」とともに定着させるためにまとめたもので、「書評」集という性格上、基本的にすべて「借り物」であり、私としては、いわば一種の「仮免」のようなものだと思っています。次回は、『競合する経済思想―資本主義と社会主義との知的格闘から』と題する研究書を、ぜひ数年後には出版したいと思っています。**博士学位論文にもとづく内容ですが、それが刊行できれば、「仮免」を卒業できるのではないでしょうか。『経済学の宇宙』（第八章）で論

述があるように、東大での岩井「経済学史」講義をとりまとめた単著の刊行をお待ちしています、そしてぜひとも岩井先生の本で「対談」させていただきたい、いや「対談」することは可能でしょうかと岩井先生に申し出てみたところ、私のメール文面があまりよくなかったせいもあるのか、岩井先生は「塚本さんが経済学史の本を次に刊行されたら、そのときはもちろんぜひ喜んで対談に応じます」と（私の本来の意図を取り違えた）返信をされたので、それならば、頑張って次回作をまとめようかと逆に思い立ったという事情もあります。岩井先生の「帯推薦文」には、「この本によって、新たな知的冒険に旅立つ若い読者が一人でも多く現れることを願っています」とあります。本書を手に取ってくれた読者に対するメッセージですが、**この文章はそれと同時に著者である私自身に向けられたものであるとも思っているのです。著者の私自身が、次なる「新たな知的冒険に旅立つ」ことへの温かいエールを送っていると読み取れるからです。**次回作にて岩井先生との「対談」が実現可能か否かは私次第なのです。

＊

最後の三つめは、そうした上記の知的営為を継続していくうえでの基本精神として、吉川先生の「帯推薦文」にもあるように、いわゆる「経済学学」との決別をより明確に意識化することが絶対に欠かせないということです。やや大胆にいうならば、「経済学の冒険」には、実際のところ「誤った」冒険もありうるということであり、そのような「冒険」は、経済学の未来には無害どころかむしろ有害にすらなる可能性があるのではないでしょうか。さらにいえば、吉川先生が警鐘を鳴らす「経済学学」という事態の汚染度は、主流派の新古典派経済学の内部にとどまらず、かつてはそれとの有力な対抗関係にあったマルクス経済学においても、そして学派を問わず「経済学史」という専門分野を研究している経済学説・思想史研究においても同様に拡がっているのではないか、とさえ思われるのです。研究者みずからが「経済学学」という事態に陥っていることにすら「無自覚」

であるならば、そのことの影響はいっそう甚大で深刻です。

近年の経済学教育問題をみても、ミクロ・マクロ・計量（統計）を支柱とする経済学の教育カリキュラムの一元化がひときわ問題視され、マルクス経済学を扱う経済原論や経済学史・社会思想史などの分野の著しい軽視が加速化しています。たしかに、経済学の多様性を堅持する観点からみても、偏向の強い一元化され過ぎたプログラムに私は反対ですが、そこには「マルクス経済学」や「経済学史」といった専門分野の研究者自身に起因しうる問題もあることでしょう。考察対象をあまりに狭く設定し、現実からも遊離し、歴史上の経済学者の些末な文献考証に多大な時間を浪費する傾向すら見受けられます。細分化され過ぎているため、経済学史を専門としながらも生産的な知的交流が希薄か皆無であり、「経済学史の発展」には何らかの寄与はあるにせよ、概して「経済学の発展」にはほとんど貢献していないのではないでしょうか。**吉川先生の『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』の最後には、次のような示唆に富む文章が記載されています。「ケインズとシュンペーターの経済学はけっして博物館入りすべき過去の遺物ではない。経済学は今や壮大な知的遊戯としての『経済学学』になってしまったように思えることもある。そうしたなかでわれわれが現実の経済と向き合うとき、力強い知的源泉となるのがケインズとシュンペーターの経済学なのである[11]。**

本書は、ケインズとシュンペーターの経済理論の発展的系譜を詳細に描き出すこと（経済学史）を主要目的のひとつとして書かれているとはいえ、それでもひときわ大きな迫力に満ちているのは、ケインズとシュンペーター二人の経済学を「有機的に統合する」という挑戦的難題の「未来志向的」かつ「独創的な」スタンスが明確であり、さらにそのスタンスを「反省的な」学問としての経済学史そのものを捉え直すことをつうじて、一貫して基礎づけているからではないでしょうか。吉川先生にせよ岩井先生にせよ、いうまでもなくお二人はともに「理論家」ですから、その「理論家」が語り直す「経済学史」は、経済学説史専門の研究者による「経済

学史」とは基本的に大きな違いがあるはずです。なぜならば、「経済学史」というものを「経済学史」そのものとして研究されているのではなく、それは、現実の多様な経済問題や経済現象をよりよく理解し解明するために欠かせない経済理論の再構築という側面において大きな示唆を与えうるのであり、ときに「経済学の歴史」そのものを塗り替えるものにもなりうるからです。学問としての「経済学史」を問い直すとき、私にはそれらは常に念頭に置かれるべき重要な論点をなしていると思われるのです。**あえて一言で言うならば、「何のための経済学史（の研究）なのか」という、「経済学史の存在意義」を問い直し続ける必要があるということにほかなりません。それは、問うことを不要とする自明の存在ではありません。**

いずれにせよ私が次回「経済学史」をメインテーマに本を書くならば、吉川先生や岩井先生が描き出されている「経済学史」の領域に、少しでも近づきうるような作品を目標にしたいと思っています。吉川先生ご自身は、「経済学学」という経済学の現状が抱える深刻な問題から脱却するべく、集大成としての大著『マクロ経済学の再構築―ケインズとシュンペーター』（岩波書店、二〇二〇年）を出版されておられます。主流派の新古典派マクロ経済学とは根源的に異なる、まさに正真正銘の「マクロ」経済学の再構築に挑まれておられるのです。**では吉川先生において、経済学をめぐるこれからの「知的冒険」とは、いったいどのようなものになるのでしょうか。吉川先生ご自身が専門とされている「マクロ経済学」やそれにもとづく「日本経済論」などの研究をベースにしながら、たとえば「経済学史」のテキストを執筆されるのもよいのではないでしょうか。**ただすでに、『ケインズ―時代と経済学』ちくま新書、一九九五年、『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』ダイヤモンド社、二〇〇九年といった、「経済学史」というものに対応する質的水準の高い作品が存在しています（経済セミナー増刊『総力ガイド！これからの経済学―マルクス、ピケティ、その先へ』日本評論社、二〇一五年、に所収されている吉川先生のインタビュー記事「歴史の流れと経済学」を読ませていただくと、吉川先生の「経

済学史」についての知識の該博ぶりが強く伝わり、新たな一書をおのずと期待したくなるのです）。個人的希望をあえていえば、ぜひ「自伝」を刊行していただきたいです。吉川先生の自伝があれば、拙著の第四章はより充実したものになったと思います。

拙著『経済学の冒険』をめぐる吉川先生との「対談」は、まさに一期一会といっても過言ではありません。『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ』に、吉川先生は、「すばらしい書評を書いて戴き有難うございました。良きエコノミストになるよう祈ります」とかつて書いてくださりました。本稿冒頭においても述べているように、その日付は二〇〇九年六月一六日。今回もまた本書を持参し、「良きエコノミスト、快走ですね！」と新たに書き加えていただくことができました。もちろん日付は二〇二三年九月一三日。本当にありがたいことです。さらに後日、二〇二三年一〇月二一日の各紙新聞朝刊をみて、吉川洋先生が今年度の文化功労者にご選出されたことを知りました。「書評は文化だ」という力強い推薦文をお寄せくださった吉川先生が文化功労者に選出されたことは、私にとってもひときわ感慨深い出来事でした。

今回の吉川洋先生との「対談」は、私自身の「経済学の冒険」をこれからも続けていくための貴重な機会となりました。あらためて深く感謝申し上げます。

追記：本稿作成に活用した参照文献は本文中に記載のため、割愛いたします。

注

（1）岩井克人（聞き手＝前田裕之）『経済学の宇宙』日経ＢＰ・日本経済新聞出版本部、二〇二一年、六一四頁。
（2）吉川洋『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ――有効需要とイノベーションの経済学』ダイヤモンド社、二〇〇九年、一一三頁。
（3）同書、一五一頁。
（4）岩井克人＋三浦雅士『資本主義から市民主義へ』新書館、二〇〇六年、一九四頁。
（5）吉川洋『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ――有効需要とイノベーションの経済学』ダイヤモンド社、二〇〇九年、一八二―三頁。
（6）宇沢弘文・内橋克人『始まっている未来――新しい経済学は可能か』岩波書店、二〇〇九年、一八一頁。
（7）間宮陽介・若森みどり・佐々木実の三名による座談会「カール・ポランニーと宇沢弘文――『人間の自由』と『制度』をめぐって」、『世界』岩波書店、二〇二三年、六月号も参照。それは、特集「もうひとつの資本主義へ――宇沢弘文という問い」の一部である。
（8）佐々木実『今を生きる思想 宇沢弘文 新たなる資本主義の道を求めて』講談社現代新書、二〇二二年、一二六頁。
（9）宇沢弘文『人間の経済』新潮新書、二〇一七年、一七六頁。
（10）宇沢弘文『宇沢弘文 傑作論文全ファイル』東洋経済新報社、二〇一六年、三二八頁。
（11）吉川洋『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ――有効需要とイノベーションの経済学』ダイヤモンド社、二〇〇九年、二七〇頁。